

# 手賀沼が海だった頃

NO. 13

地域の歴史や自然を皆で語ろう

2005. 3. 14

## 手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報



模型製作。武藤光さんを中心に

シンポジウム&企画展示会「松ヶ崎城と街道（まち）―中世柏地域の陸上交通―」を昨年11月28日（日）、柏市中央公民館で開催した。当会主催、柏市、柏市教育委員会、千葉歴史学会、千葉城郭研究会後援。  
当日10時、展示室には松ヶ崎城跡などの出土遺物、会員手作りの大絵馬、模型、数多くのパネルが並んだ。午後1時から



菅谷孝之さんの大絵馬製作



展示遺物の選択

木英夫さんが、壇上で講演・パネルディスカッション

祝柏市制施行50周年  
当会設立5周年  
記念シンポジウム  
&企画展示会  
11月28日に開催



シンポのための踏査



展示物の搬入

5階講堂でシンポジウム。4人のパネリストと顧問鈴  
を行った（採録を2〜6面に掲載）。シンポジウムは平成11年以来だが、参加者は141人。「とても面白かった2時間があれば質問したかった」。終了後、展示室で再度見直す人も多く、「良いイベントだったようです」という声が翌日には役員のもとへ届いた。  
今回、柏市市民公益活動補助金を受け、各種展示物の製作が可能



パネル張り



完成した大絵馬「松ヶ崎風景図」

5周年イベントは多くの作業を必要とし、いろいろな方のお力をお貸りしました。厚くお礼を申し上げます。  
▽ △  
文化財担当の方々には出土遺物の選択、搬出入、セッティングなど当初からアドバイスやご協力を、いしど画材の石戸新一郎さんにも特別のご配慮をいただいた。



会場セッティング



シンポジウム



当日の展示会場



松ヶ崎城・北柏駅付近の模型

# 歴史シンポジウム(採録)

## 松ヶ崎城と街道(みち)―中世柏地域の陸上交通

平成16年11月28日

柏市中央公民館

はじめに 当会顧問・國學院大學講師

鈴木英夫

このシンポジウムのねらいは2点。第1点は2回の発掘確認調査の成果を踏まえ、「松ヶ崎城はどのような城だったか」を探ること。また、隣接する北柏駅周辺一帯の遺跡は、実は中世の道とそれに付随する宿だったといわれる巨大な遺跡。2点目は「それらの遺跡と松ヶ崎城はどのような関係だったのか」ということ。5年前は、「松ヶ崎城は海に面していた」との視点で水上交通を強調したが、今回は道という陸上交通を考えてみたい。どちらも今日結論の出る問題ではないが、一緒に考えていきたい。

「手賀沼と水戸道中」  
松戸市戸定歴史館 学芸員 中山文人さん

「手賀沼と水戸街道」というのは、交通の水路と陸路が象徴された言い方。中世の「小金領」「葛東郡(かつとうぐん)」と呼ばれる地域単位でみたときに、この地域の水陸交通についてはどのようなことが言えるだろうかということ、今日はお話しする。

この地域の成り立ち

柏市になる前のこの地域は葛飾郡の一部だったが、「葛飾

郡」が最初にできたのは8世紀ぐらいと考えられ、10〜11世紀頃に「葛西郡」と「葛東(かつとう)郡」に分かれたようだ。このあたりは葛東郡と相馬郡の境目だった。葛東郡の郡境はおおむね太日川と呼ばれた現在の江戸川。江戸川上流は当時なかったが、それに類する川が郡境になっていた。

12世紀ぐらいになると、荘園が多く出てくる。葛飾郡は、①現在の葛飾区・江戸川区にあった「葛西御厨」、②野田市・埼玉県の三郷市・茨城県の古河市まで南北に細長く広がっていた「下河辺荘」、③我々が住んでいる「葛東」と呼ばれる地域に3分割されたようだ。鎌倉時代になると、「葛西御厨」は鎌倉幕府の有力御家人葛西氏という武士が、「下河辺荘」は下河辺氏が押さえる。「葛東郡」は全面的な荘園化はせずに、おおむね千葉氏の一族が支配していく。

南北朝から室町時代、葛飾郡の他地域は鎌倉の北条氏や鎌倉公方にとられるが、「葛東」は基本的に千葉氏一族が押さえたまま戦国時代を迎える。その戦国時代、葛西城は上杉氏や小田原の戦国大名の北条氏に占領されたり、下河辺荘は築田氏が支配する。葛東は、小金城にいた高城氏が小金領という形で領有。小金領は、葛東のほぼ全域に中相馬・南相馬をあわせた範囲である。

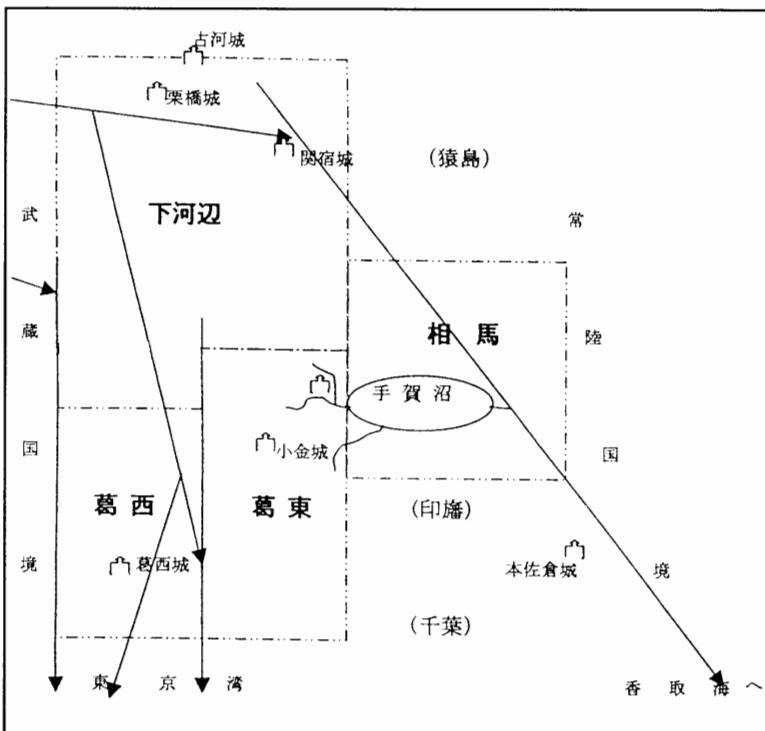
水路・陸路を併用した交通

パネリスト

- ・中山文人さん
  - ・間宮正光さん
  - ・井上文男さん
  - ・遠山成一さん
- 司会 鈴木英夫

レジメの文書史料は、戦国時代またはそれより後のもの。水陸共、流通に關係する資料はこの時代にほぼ限られ、今回はその中でも小金領の時代を主に考える。

まず川について(左図参照)。葛西と葛東の間をまっすぐ下に伸びるのが江戸川(太日川)、その左側の葛西城の西を通っているのが中川、「武蔵国境」と書いてあるラインが隅田川・入間川の混じったような水域。右の方、「香取の海」と注記した、狭めの流れが今の利根川。当時銚子の手前、今の茨城県・千葉県境の境目あたりには香取の海と呼ばれる非常に広い水面が広がっていた。東京湾と対比できるようなたくさん



港、津があり、霞が浦だけで88の津があつたと伝承されている。

葛東とか小金領と呼ばれる地域は言い換えれば、「江戸川・中川に流れ込む川」と「利根川」の2つの川の間に挟まれた地域。「東京湾」「香取の海」、それぞれから遡ったときの合流地点から少し南側。合流地点は下河辺荘なので、その少し南側に位置することを覚えておいていただきたい。

これまで、今の利根川と当時の太日川・中川に類するものが関宿でつながっていたかどうかが長く議論され、現在も決着がついていない。具体的には、銚子の方から船で利根川を遡り、関宿で回り、江戸川を下つて東京湾にでるルート、及びその逆ルートが、室町時代や戦国時代にあつたということ。あれば水運は盛んだたろうし、なければそうではない。しかし、私はつながっていてもいいと思う。

2つの川を結ぶ陸路が発達していれば十分ではないだろうか。水上交通に関する史料をレジメで紹介した。水戸―関宿―江戸ルートで「荷物を積みすぎてはいないのに船底がつくので、はしけ船に荷物を積み替えて、難所の何か所かを通過した」との事実がわかる。また佐倉―関宿、葛西―栗橋の船の往復は、「舟一艘」の行き来で、せいぜいその程度の川だった。一つめは江戸末期、二つめは戦国末期の史料だが、全世界規模の気候変動がない限り、関東南部へ流れ込む川の総水量はそう変わらない。戦国時代であれ、平安時代であれ、河川のルートが変えられても、水量がそれほど変わらない限り、川をそんなには使えなかったのではないか。

物理的要因や経済的要因が他にも考えられるが、大枠で私はこのように考える。

つまり、全て水路で押し通すのではなく、二つは陸路、こゝは水路と使い分けをしていたと考える方がはるかに自然だろう。そういう視点で資料を見てみると、この地域の特性がいくつか見えてくる。

### 小金―向小金―篠籠田―高田―根戸ルート

陸上交通に関する史料から、小金領の中のうちこちを行

き来する道があることが読みとれる。また、「中世の地勢と地名」地図中の地名は、14〜16世紀ぐらいまでにあつたと確認されているもの。これだけ中世の地名がでる土地柄は、千葉県の中でも非常に珍しい。著名な「本土寺過去帳」の恩恵である。この地域はさきほど話したように「2つの大きな港「香取の海」と「東京湾」へ通じる川・水系」の「近づく場所」。その一方の「香取の海への川・水系」の一つとして、手賀沼がある。

手賀沼と江戸川―言い換えると「香取の海水系」と「東京湾水系」―を結ぶ道として、本題の「水戸道中」の話に移る。水戸道中は江戸時代の後半ぐらいには今のルートになつていたことは間違いないが、江戸時代前半となるとなかなか難しい。そして、戦国時代に他に道はなかつたかという問題へもつながっていく。

参考となるものに江戸時代の正徳5年「駅路鞭影記」がある。「呼塚は長雨になると道が悪くなる。そのときは向小金（むかいこがね）から根戸まで回る道がある。篠籠田を通り1里ほど余計にかかる」という内容。実際のルートがどこかは大変難しいが、中新宿あたりから北西へ行くと、前ヶ崎城や名都借城と呼ばれる城が2つ存在する。そのあたりを経由して、流山の長崎から大堀川の上流の駒木、あるいはその前に豊四季（中世では「鞍掛―くらかけ」といった）を経由して駒木または高田近辺に入つて、大堀川沿いに道を下っていく。川を使つたかもしれないが、下っていくと松ヶ崎を経て根戸に行くことができる。呼塚を通らないで、そういうルートが間違いないことがわかる。

まとめると次のようになる。関宿で大きな2つの川がつながつていようがいが、水運というのはそう簡単に、電車のようにはきちんきちんと動けるようなものではない。季節性もあるし、浅瀬もある。そうなれば、これだけ存在する中世の村や町をつなぐ道が、2つの川を結ぶという立地のために、この地域には特に発達してはならないのではないだろうか。そのルートの一つとして、「篠籠田」を通じて、大堀川沿いに松ヶ崎に出て、根戸へ向かう道」を提示した。

## 松ヶ崎城跡の確認発掘調査でわかったこと①

山武考古学研究所 間宮 正光さん  
首席研究員

間宮さん・井上さんの講演は、スライドを見ながらの発掘報告。紙面の都合もあり、一部抜粋となりましが、全体的な発掘結果はシンホ資料または柏市教育委員会から発行予定の発掘報告書をご参照ください

（編集より）

私は考古学的手法で行われた平成14年度調査を報告する。同調査の主な目的は、松ヶ崎城の形態、使用時期と、どの程度残っているのかを把握すること。そのために、地形測量を行い、測量図を作成、またそれをもとに部分的に掘り下げる確認調査をした。今日はシンホジウムのテーマの中世を中心に、スライドを見ながらお話しする。

### 【虎口イ】

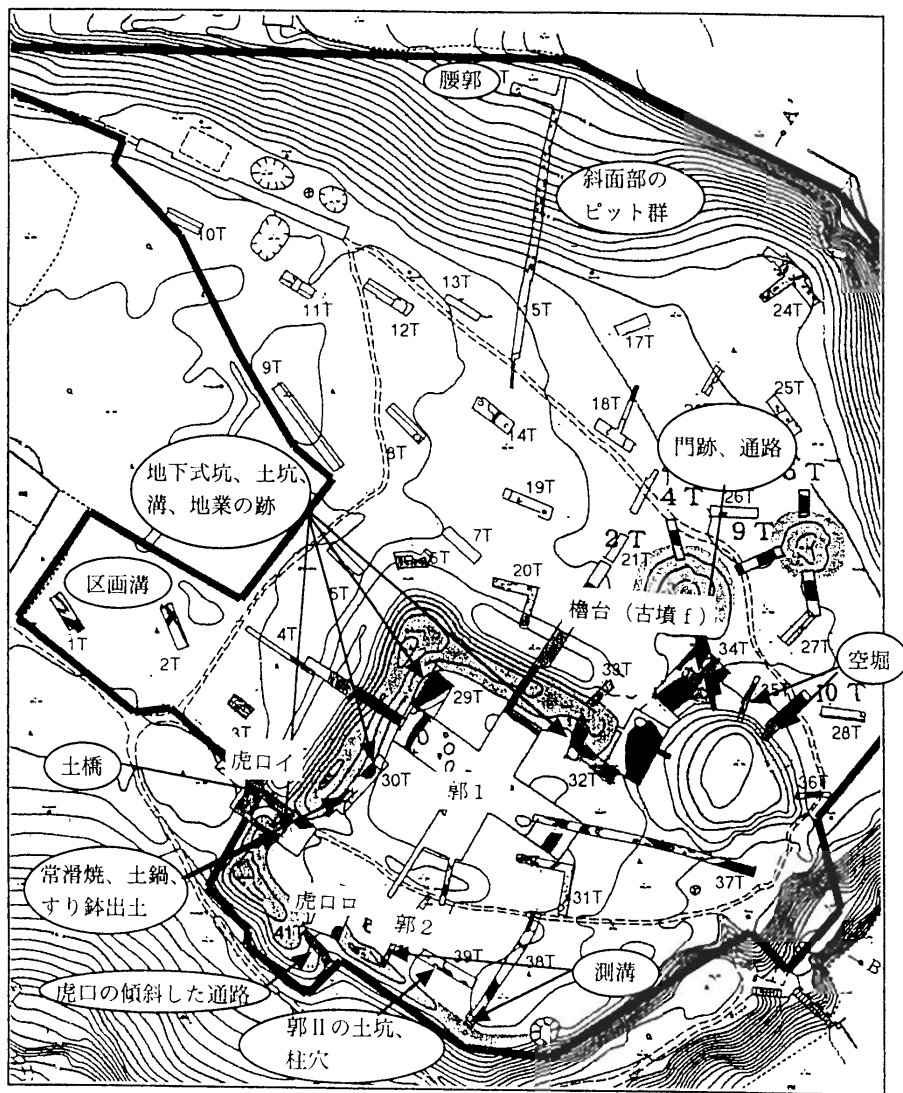
堀と土塁があり、現状入り口に見えるところ。虎口前の狭い通路は土橋と考えてよい。当時通路は城の中へまっすぐ入つていかず、土塁でさえぎられて一旦折れて入つていた。いわゆる喰い違い構造の入り口だが、幅は2間程度が想定されるので、あくまで補助的な出入り口ではなかつたか。

### 【櫓台】

櫓台（古墳イ）と考えられている高まりだが、円墳であることを確認。古代の墓である古墳を中世の段階で再度活用していることがわかった。今回の調査で櫓台の外側に城の施設の一部である堀を検出。古墳には墓域を区画するために周溝を巡らすのが、それを一旦埋めて、城用にあらたに堀を掘っていることが明らかになった。この地区を守ろうとする意識の表れで重要な発見だ。その堀の規模・全容は調査できず不明。

### 【土塁と堀】

城中心部の郭1の北と西に造られている。土塁・堀について



「平成15年度確認調査図面」(柏市教育委員会作成)に一部加筆

ては、北と西1カ所ずつを調査。西の上塁は北に比べ残りがよく、しつかりした造りだ。堀はきれいなV字状。埋まった土の状態から、人為的な埋めもどし、堀の掘りなおし、改修はないことがわかった。西の堀底からあがったところに小さな穴(小ピット)が検出され、同じようなものが北側でも確認された。柵か、土塁を作るときの何らかの支柱のようなものがあつた可能性がある。

【郭1】  
城の中心で、建物跡が出るのではと期待された場所。痕跡を面的に調査しようと、かなりの範囲を掘ったが、土塁

状のものは寄せ集められた感じで、土塁とは判断できなかった。郭1と郭2は一つで、方形の広い空間だった可能性が高い。

【全体として】  
城は守るという意識があるので、しくみ・システムが時代とともに発達するが、松ヶ崎城は機能的に守るという技術があまり発達していない。土塁の造り方でも16世紀後半、戦国時代後期の土塁は種類の異なる土を混ぜて積みあげたり、ガツチリした強固な造りだが、松ヶ崎城の土塁はそれらとは違う。城の施設などは完成された状態と受け取れるが、使

内側の側溝のものは、建物の使用時期と直接結びつけて考えられるものはみつからなかった。人が使用した地面は硬化するがそれもなく、どちらかというと軟弱という印象をうけた。郭1と郭2をわける土塁

用の痕跡がないことや出土遺物が乏しいことから、恒常的に使用された城と考えるのは難しい。

## 松ヶ崎城跡の確認発掘調査でわかったことII

柏市教委文化課 井上文男さん  
文化財担当

第2次調査は文化財保護委員会議に諮り、主郭を中心にした調査とあわせて周辺の調査を追加。全体を見てから結論を出すことになり、15年度再度確認調査を実施した。

### 【台地北側斜面に柱穴】

北側斜面に細長いトレンチをいれたら、斜面の中間あたりから下に向かつて柱穴が20カ所検出。規則性はみられず、任意に掘られた感じだった。柵か、作業をするときの何らかの支柱にした可能性がある。

### 【門跡】

櫓台(古墳f)と北側にあるもう一つの古墳の間に、幅約2・2メートルの硬化した通路と、それを両側で挟む柱を据えた2個1対の門跡と思われる柱穴が検出された。それぞれの柱穴は、まず楕円形に大きく掘り、その中心に木柱を埋めたらしく、柱を抜き取ったと思われる小型円形が楕円の中央部分に確認された。門跡の東側は櫓台、西側は堀(溝)により遮断されていた。これまでは、西側、南側のみ虎口があると考えられてきたが、今回の門跡の発見で、東側にも虎口があることがわかった。

### 【郭1・郭2】

どちらにも、建物跡や使用状況を示す硬化面はやはり見られなかったが、土塁付近で側溝、地下式坑、溝などの作業のあとが見られた。郭1は郭2に比べ、約80センチ低かった。虎口イと土塁の内部から、内耳土鍋、土器すり鉢、土師質土器が確認された。

#### 【4郭】

2条の溝が確認されたが、中世よりもっと古い時代、平安時代頃のものと考えられる。

#### 【全体として】

1次・2次のまとめをお話しする。松ヶ崎城は土塁・空堀に囲まれた方形単郭構造を基本とし、15世紀後半〜16世紀前半の室町・戦国時代には造られていたものと考えられる。土塁の形状や構造が、版築技法や横矢掛かり(16世紀後半に用いられた土塁の積み方や城の構造)以前の方法によって構築されていること、出土遺物が常滑焼甕、内耳土鍋、土器すり鉢、土師質土器などが主体であることから判断。また、生活や戦争の痕跡が見受けられないことから、純粋な軍事施設とは異なる性格が考えられる。

今後の課題としては、北東面で門跡が虎口として機能したかどうか、また空堀から土塁への立ち上がりや、北側斜面でみつかった小ピットが、一部が面的に広がるかの確認などが考えられる。

小ピットや柱穴のことがより広い面積で分かれれば、軍事的な意識を読みとることができるといえる。

### 松ヶ崎城はどんな城だったか

千葉城郭研究会 遠山成一さん  
事務局長

私は5年前のシンポジウムにも参加させていただいた。その後、確認発掘調査が行われたこともあり、これまでの経過と現時点でわかっていることを中心にお話ししたい。また、城郭を構造面から研究しているので、そういった面からの松ヶ崎城の話、さらには今日のねらいの一つである北柏駅付近の遺跡との関係にも触れられたらと思う。

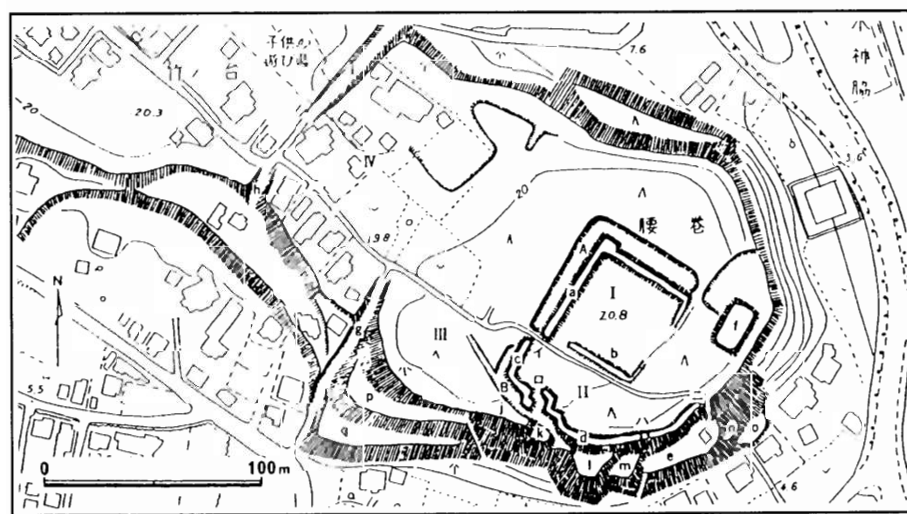
### 松ヶ崎城の性格

形の上からは、方形館に分類していいと私も考える。館と城という言葉は、鎌倉から南北朝初期までは厳密に使い分けられていた。館は武士や領主階級の平時の日常の住居で、城は非日常的な場所。時代とともに恒常的に合戦が起きるようになると、館が防御を強め、館城(やかたじろ、かんじょう)となる。松ヶ崎城は、まさにそのような館城ではないかと当初は考えていた。

松ヶ崎城の年代は、15世紀後半から16世紀前半で、形や構造の上からも間違いないと思う。館城が開始されるもほぼこの頃から、15世紀後半とは実年代で言うと1450年代。ちょうど1455年に関東では享徳の乱という大乱がおこる。15世紀後半というのは、享徳の乱と重なることを考えていただければいい。

松ヶ崎城は、はつきりと深い空堀を持つ。今私が勤務している四街道・印旛郡周辺には土塁だけで空堀を持たない方形館が結構あるが、在地の小領主の館跡ではないかと思う。ただ、松ヶ崎城はそれらと異なり、規模がもう少し大きいというか、格式が高いと思う。松ヶ崎城を5年前に実際に見て、郭の中が外より低いのではないかと指摘したが、測量の結果もそうだった。このような例は佐倉の白井屋敷跡、井野城跡、四街道市の池の尻館跡、千葉市の南屋敷館跡の4カ所が見られる。松ヶ崎城も似ているが、決定的に違うのは生活した痕跡の有無。先にあげた中の3例では発掘により見つかったが、松ヶ崎城では見つからなかった。

5年前のシンポジウムに、私は字名「竹の台」を「館の台」の訛化として、「松ヶ崎城は館跡ではないか」ということの補強材料として使った。しかしその後、竹の台の位置が少しずれていることに気付いた。「竹の台」は台地基部にある。そこに鎌倉または南北朝頃の領主の屋敷があつて、戦国時代が始まる頃に台地先端に松ヶ崎城跡が造られた可能性はないか。ただこれは字名からの推測なので、あまり根拠はない。

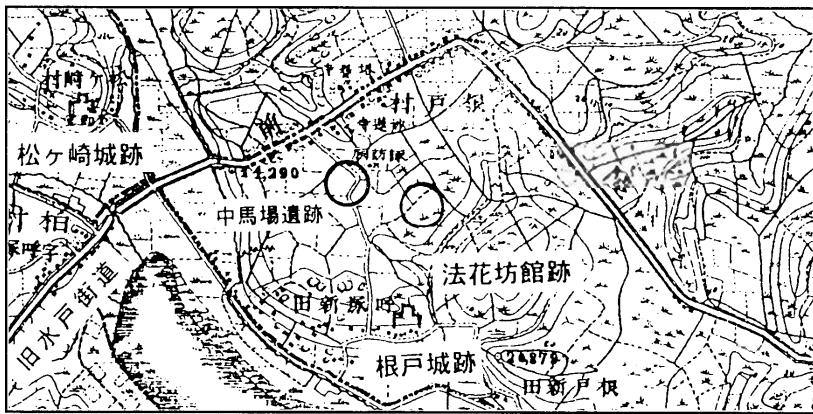


松ヶ崎城跡概念図(作図 石田守一氏)

(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書』1995)

### 3つの虎口の謎

「松ヶ崎城は前身に館があつて、その後改修した」という5年前の私の考え方は、発掘の成果から否定されるべきだろう。松ヶ崎城は戦国時代の始まる頃に造られて、16世紀の前半ごろまで利用されていたのだろう。ただ、城の性格は非常に難しい。発掘報告にあつたように「軍事的ではない」ということに、賛成せざるをえないのかと考える。



中馬場遺跡位置図（迅速側図「我孫子宿」）

（梁瀬祐一「柏市中馬場遺跡の中近世遺物について」2003）

代で、現在は何も残っていない。非常に位置づけが難しい館跡で、最大の特徴は1辺約200メートルの土塁と空堀とに囲まれていること。200メートル四方というのは千葉県では1例もなく、全国的にも珍しい。千葉氏など有力な氏族の屋敷が方1町の1000メー

トル四方、地域の領主層になると、方半町の50メートル四方の館が普通。しかも土塁は、失われる前は高いところで3メートル近くあったらしい。

背景には、梁瀬祐一さんが最近明らかにした「流通の拠点であった中馬場遺跡」を意識している館跡であったことは間違いない。中馬場遺跡Ⅱ宿という位置づけを梁瀬さんは与えたが、私も正しいと思う。そこには流通にかかわる莫大な富が蓄積されていたはず。具体的には中山さんが報告された「水戸街道の前身にあたる中世の道」、その周辺に栄えた「手賀沼水運」という水陸交通の接点であったために莫大な富が集積され、非常に大きな館跡が造られたと考えるのが一番妥当。ただ、これ以上のところはわからない。高い土塁と、柱穴をめぐらされた空堀を持ち、かなり軍事的な面を意識した館跡で、柱穴はおそらく侵入者を防ぐためのもの。柵列、逆茂木、乱杭などではなかったか。

同館跡について、「相馬御厨の関係施設」という意見もある。莊園はそれを管理する預所・雑掌といった、莊官の事務所のようなものがあるが、200メートルというのは大きすぎてどうも考えられない。土塁の規模、空堀からすると、鎌倉までさかのぼるのは難しい。数少ない遺物は14〜15世紀の瀬戸系の陶器片など。それが館跡の使用された時期と仮定すると南北朝から室町初期という年代が与えられる。土塁や空堀の規模からいっても、このあたりではないかと感じる。

では、支谷を隔ててすぐ南にある根戸城との関係はどうか。根戸城跡は一度見たが、明らかに戦国後期の構造で、北側に「根小屋の坂」という小地名もある。おそらく16世紀の後半、1550年代以降ぐらいの城ではないかと考えられる。

根戸城と松ヶ崎城は若干時代がずれる。おそらく最初法花坊館跡があり、それと重なるかどうかかわからないが、松ヶ崎城が出て、その後根戸城が出るという年代観が与えられる。ただ、3者が同時期に存在したかどうか、細かな

ところまでは言えない。想像をたくましくすれば、松ヶ崎城が機能しなくなったあとに、何らかの理由で根戸城ができたのではないか。たとえば松ヶ崎城の船着場が土砂の堆積などで使えなくなったなど。

また、水戸街道の元の中世の道は、当時は手賀沼の低地部分におりたあと、松ヶ崎城の台地にとりついたのでないかと思う。松ヶ崎城については今まで水上交通を主に考えてきたが、「水戸街道の元の道—中世にまで遡る街道」にもかなり関係している。私は関所的な役割を期待していたが、発掘の成果ではそれはでないようだ。これから、中馬場、法花坊、根戸城なども含めた広範囲な歴史考察をしながら——さいわい根戸城はまだ残っている——その関連の中で松ヶ崎城の位置づけを考えることが重要になると思う。

### まとめに代えて

鈴木英夫

松ヶ崎城の確認発掘調査が2回行われ、遺構は確認されたけれども遺物があり出てこなくてがっかりされた方も多いのでは。しかし今日の話をお聞きいただき、わがりのように、遺物がでてくるかどうかではなく、「新しい歴史的事実の解明」に役立つことが一番大切。その点では松ヶ崎城は、なぜか使用した痕跡がないという新しい謎を産んでくれた。その謎に取り組んでいる途中で、中馬場遺跡・水戸街道の元の道の存在も見えてきた。松ヶ崎城だけを見るのではなく、地域として見なくてはならない。前よりは立体的にみえるようになったが、より大きな問題を抱えた。今後も皆さんと一緒に謎を解明していければと思う。

本日はありがとうございました。

\*この採録は講師の皆様にご覧いただきありがとうございました。また、当日はハネルディスプレイスセッションも行いましたが、こゝでは割愛します。  
(浦久淳子)

# 新潟県中越地震 長岡からの報告

青山 和平

私は千葉県柏市に住んでいる視覚障害者です。目は光と影がわかる程度ですが、猪突猛進といいかげんさでどこにでも出かけています。ネハールにも行きました。10年前には、ヒマラヤのアンナプルナの近くまでグルン渓谷を歩いています。

私は中越地震の後、間もなく長岡に行きました。はり灸指圧で被災者の皆さんの心と体を癒せるかもしれないと思ひ、出かけて行つたわけです。

11月の始めは、まだ震度4や5の余震が毎日起こるような時期でした。この余震のために、壊れていない家々の皆さんも夜には公民館などで寝泊りしていました。私が最初に泊つたところは、長岡市神田コミニティセンターでしたが、そこに来られる皆さんもそんな方々で、おばあさんたちの中には余震の恐怖に泣き出す人が何人もいました。山古志村梶金の関さんというご夫婦の家は、すさまじい本震でアツという間に崩れ去つたそうです。ドカンという音と共に、座っていた関さんは空中に放り上げられ、ごろごろ転がされている間に、巨大な梁が落ち、壁が崩れ、後で見るとすべてが瓦礫の山となつていたといひます。関さんは、何がおきているのかわからないまま、何とか這い出してきたそうです。次の余震までの10分くらいの間に出られたからよかつたもの、「もう少し遅れたらどうなっていたかわからなかつたよ」と、40センチか50センチのわずかな隙間を、奥さんと共に這い出してきた恐怖を語ってくれました。

私は、余震が続いている長岡に11月5日から1週間、12月1日から10日間いました。最初の時には皆心が落ちつかず、不安がとりまいていました。余震、布団と布

団がくっついているプライバシーのない暮らし、将来への不安、崩れ去つた家々を思い出しては涙し、それはそれはたまらない状況でした。それでも明るく、冗談を言い合いながら集団生活の煩わしさを吹き飛ばしていました。が、その雰囲気慣れなくて、戸惑っている人も少なくありませんでした。そのような人は睡眠不足や胃痛を始め、自律神経失調症の入り口に立っていました。

私は、たまたま自律神経失調症や神経症などをほりや指圧で治すことを専門にしていました。ですから、話を聞くことや元気づけるのも仕事の一つでしたので、この皆さんと、すぐに打ちとけられました。

この被災地には、慰問やボランティアに来る人々が全国から訪れていました。さだまさしみたいな有名人から、私のように名もない者までと様々です。ここが選挙区である田中真紀子夫妻も、私がいた2回ともやって来ている話をしていきました。名もなき人々の中には、石狩鍋を携えて北海道からやってきたボランティア団体、神戸の美容室組合、山梨からは抹茶やコーヒーを提供する一日喫茶店、本当に様々なボランティアに出会いました。私が一番感動したのは、宮城から来たお父さん&おじいちゃんコースです。電子ピアノを携えて、懐かしいメロディーをたくさん歌ってくれました。「みかんの花咲く丘」とんがり帽子の赤い屋根」と懐かしい曲が進むにつれ、私の胸は熱くなり、「青い山脈」の時にはついに涙がこぼれてきました。気がつくとも周りの人々もみんな泣いていました。ボランティアに来ていた若者も涙し、体育館そのものが泣いている、そんな感じがするほどすばらしい感動でした。

ボランティアは様々な段階があると思います。やや強制的なもの、自己表現や自分探しのレベル、社会や周りの人々に感謝の気持ちでボランティアをする人、そしてマザーテレサのような人もいます。全ての人がマザーテレサのようになれるわけではありませんが、それを目標にし、心を、魂を磨いていければよいのではないかと思っ

ています。

中越地震のボランティアになぜ参加したのかというと、視覚障害者が一般的な社会の中で、しかも緊急事態においてどれだけ貢献できるかを、実践したかったからです。今回、私より早く東京の両国からやって来た大田さんという視覚障害者がいました。この人を始め多くの視覚障害者が、マッサージュやはり灸などでボランティアをしていました。このことはある一定の条件があれば、障害者でも十分社会貢献できることを意味しています。

私は、山古志村に外部からまだ人が入れない時に、仲良くなった村の人に連れて行ってもらいました。歩いている舗装道路には、亀裂が何百メートルも続いていた、突然50センチもの段差ができていたり、それはひどいものでした。雨が降り、土砂で大きな亀裂が埋まり、そこが柔らかなために足がもぐつてしまったようなのです。田んぼの水が、あぜ道から流れ落ちていました。その田んぼには、砂が噴出した跡があり、杖で刺してみると、柔らかな砂の感触でした。これだけでもすごいのに、連れて行ってくれた人が「山古志でもここが一番被害が少ないんじゃないかな」とほつりと漏らすのを聞いて、いかにこの地震が激しいものだったのを感じました。山古志村は鯉と闘牛の村です。家は何とか持ちこたえても、牛小屋が潰れ、屋根が牛を助けることができせん。その牛に最後の水を汲んでやると、おいしそうに飲んでいました。それを見ながらヘリコプターに乗り込んで避難して行く、やるせない気持ち。涙となつて後から後から湧き上がってきたそうです。

今回私は今まで経験できないことを経験し、様々な人々に出会い、本当に多くのことを学ばせてもらいました。私が十を持って行つたならば、千・万のものを貰つて帰つた気がします。そして、大変申し訳ありませんが、地震によつてここに参加できたこと、さまざまの方々に出会えたことを、感謝しております。

# 地域史を話す会、毎月開催中!

毎月第1日曜日の午後  
に、会員有志で地域の  
歴史あれこれについて話  
してきます。4月は次の  
通り▽4月10日(日)午  
後1時〜▽柏駅東口近  
くの駅前通商店街会議  
室(イトーヨーカ堂のあ  
る通り、レストラン伍平  
の3階。旧水戸街道近

く)▽参加無料▽問い合わせ  
事務局

会ホームページ、  
会員専用メーリ  
ングリスト開設  
中

当会ホームページは  
下記URL。イベント  
も早めにUPしていま  
すので、ぜひご利用  
を。また、会員専用  
のメーリングリストも  
開設中。参加無料で

<http://www.matsugasakijo.org/>

すが、名前の登録が必要  
ですので、HPトップページ  
のお問い合わせアドレスまで  
お申し込みください。

## おいしい料理を 食べ歩きましょう!

会員有志で柏近辺のお  
いしいお店をまわっていま  
す。今回は都内まで足を  
伸ばし、上野のキムチ通  
りで焼肉です。夜の会食

## 活動記録

平成16年11月  
17年2月  
18年2月  
・「地域史を話す会」8回  
11月7日(沼南町役場)  
講演会「もう一つの新撰  
組」に参加  
・25周年シンポジウム・企  
画展示会  
11月28日(柏市中央公

ですが、定員は5人まで。  
詳細はお問い合わせを。  
▽04-7133-6438  
松平さん

## 一緒に活動しませんか?

地域の歴史や自然に興  
味のある方、一緒に活動  
しませんか。年会費は20  
00円、申し込みは事務

# 目録素史郷土

(3)

## 中津川督章

先頃、我孫子市布佐の  
井上基家で、美術工芸の  
仲間と「第3回あいじま  
美術展」を催した。井上  
家は、江戸時代中期、手  
賀沼干拓のためこの地に  
移り住んだ江戸の豪商で  
あった。この旧家と関わ  
り、この地域について気づ  
かされた点が多い。  
その一つは、在来の旧家  
と異なり、井上家は手賀

沼岸の低地を土盛りして  
屋敷を作っていることであ  
る。手賀沼周辺には、同じ  
ような低地に立地する家  
が多い。いずれも先祖が干  
拓のために来た家だとい  
う。それらが大きな村を  
なしているところがある。  
印西市発作(ほっさく)や  
白井市

## もうひとつの 手賀沼

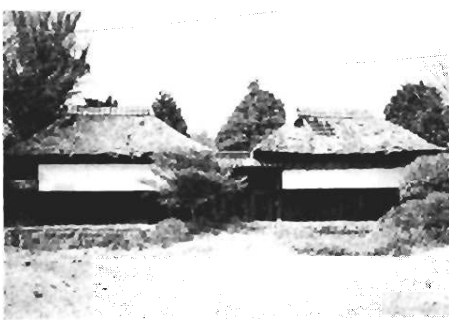
今ひとつ気づかされた点  
は、この地域は干拓ばかり  
でなく、人の流入が盛んな  
地域ということである。  
近年の東京通勤者のベッ  
ドタウン化もその一つであ  
るが、それ以前、我孫子市  
は手賀沼を望む景勝の地

として別荘化し、大正時  
代に白樺派の拠点となった  
ことは有名である。我孫子  
ばかりでなく、この地域に  
とつて白樺派の精神的遺産  
は大変貴重なものである。  
しかし、見方を変えれ  
ば、これは一種の別荘文化  
のようなものである。それ

に対し、干拓は米づくりの  
ためであつて、干拓者たち  
はこの地域に生活の経済基  
盤を築くことにあつた。  
現在のこの地域の住民の  
多くは、経済成長期以後  
の東京通勤者であるので、  
この地域で働いて糧を得て  
いるのではない。その点別

荘の住民に似ている。手  
賀沼の水辺を「いやしの  
空間」と見るのはその延  
長線上にある。  
私は干拓者たちがつくつ  
てきた低地の造形を「も  
う一つの手賀沼」と呼ん  
でいる。環境問題等で、  
手賀沼の水辺ばかりに意  
識が及び、干拓者たちが  
築いてきた低地の村々の  
景観に注意が向かないか  
らである。戦後の大干拓  
で沼そのものは消えたが、  
「もう一つの手賀沼」は人  
間活動の跡を造形として  
残している。布佐の井上  
家のたたずまいは言うに  
及ばず、発作や今井など  
水塚(みづか)が連なり独

民館)  
シンポ参加141人  
・「地域史を話す会」9回  
平成17年2月20日  
(柏駅前通商店街事務室)  
ミニ講演「相島井上家につ  
いて」スピーカーは中津川  
督章さん。参加9人。



越川昌弘家の長屋門

特の景観をつくっている。  
なかでも建築で美しいと  
思わせるのは、発作の越川  
昌宏家の長屋門である。寄  
棟のかやぶき屋根は相当に  
傷んでいるが、私の好きな  
建築の一つである。

事務局  
榎慎吾 〒217-08  
26 柏市宿連寺232-1  
14  
TEL・fax 04-71  
34-3322  
北 越川子 〒217-0  
835 柏市松ヶ崎415  
-5、1 206  
TEL・fax 04-713  
1-8879  
会報作成 浦久淳子  
TEL・fax 04-71  
55-2351